
天造神と天使の一生

轟天

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天造神と天使の一生

【Nコード】

N3183L

【作者名】

轟天

【あらすじ】

「天造神」この言葉を知っている人間は、もう居ないだろう
何故ならこの「神」は、人間界を創った天界を創った「神」なのだから

そんな神の力が使える一人の青年と一人の天使の体験した事、日々を物語として、ここに遺そうと思う
何故ならこの二人が居たからこそ今、この世界があるのだから

著者 神刀ルフ

第一章

神国年 756年

帝国領南部 ルー城

「ヲヲヲアアア！！」そんな声が戦場に響いた 「な、なんだ？！」 「大佐！！な、南門です！南門から白い何かが接近しています！！！」

「何！？こ、これは 一体 急いで本部に報告しろ！神国は謎の兵器を所有していると」「はっ！！！」

ルー城南門付近

「なんだよアレ 神国には、あんなツ！」「ブウウン」風が戦場を一閃すると南門付近一帯は血の海となった 血を浴び赤黒くなっている「神」を残し 「イケ シングンド」と声がした
しかしその声は青年の声だった

ドオオオオン！！！！

「な、なんだ？！」 「大佐！！南門が崩れました！原因は不明！！」
続いて神国軍が突撃して来ます！！」「ッ！！！！我が軍の兵はどうした！」「ダメです 完全に浮き足立ってます」「くそ！赤い悪魔め」「ズヴァアア！」「アカイアクマカ ヲニアイダナ」「阿斗！！」「ブオン！！」「どうした、仁！」「制圧完了だ、後は味方がやってくれるとき。元来のジイさんから帰って報告しろとさ」「分かった、特一大隊は帰還する！みんなに伝える、仁頼んだ」「OK」

神国軍本部 総司令部

「特一大隊只今帰還しました！」 「帰って来たか お疲れ様」
「司令どうしました？」 「ああ 今日はどうだった？」
「大丈夫でした」 「そうか 伝える、特一大隊は三日間休みとする！」 「何故です!？」 「まあ、休んでくれ 疲れただろう」
「分かりました」

特一大隊詰所

「疲れた」 「隊長！」 「どうした？」 「みんなに伝える、特一大隊は三日間休みだそうだ」 「ええええ!?!?!」
「元来のヤツめ」 「仁、聞こえるぞ中将に（笑）」 「大丈夫だよ、阿斗何でだ？」 「判らん」 「み、皆さん！今日空いてます？」 「どうした？シャル」 「いえ 久々の休みなんで、みんなでコテツに行きたいなと思って」 「賛成!」 「良かった なら、08:00にコテツに来て下さいね」 「OK!」

08:00 コテツにて

「今日は呑むぞ！」 「仁さん ちょ」 「ん？誰か来たぞ」 アツ
「ガラガラと戸を開ける音と共に現れたのは、御三家の一家、音水家の音水姫花と阿斗の友人であり「水の地」の司令官立花朝音が登場した。」 「？」
「仁は、虚ろな目をしながらシャルにこう言っ

た「俺 今回の折檻を生きて帰れたらある人に告白しようと思うんだ」「仁君？覚悟は出来てますか？」「『行きますよ』」「はい」仁は、姫花と朝音に連れられどこかに行った 少しして阿斗と猛達そしてが来店した。「？仁は？」「お二人の方に」「分かった 先に三人で飲むか」「そうですね」「こんばんは」その声と同時に現れたのは、特一大隊の兄貴分 佐久間門盛だった。

「大将！ん？凧ちゃんは？」凧とは、門盛の妹であり特一大隊のトラブルメーカーである子だ。

「もうここに居るぞ」「え？」「もしや」「正解」その言葉を聞いた二人は、ゆつくりと後ろを向いた『早ッ』するとそこには、シャルにじやれている、凧の姿があつた「くくくくくく」凧ちゃん ちょ」「くくくくくく」『呑むか』

「えっ阿斗さん？！門盛さん？！猛達さん？！なんで、無視するんですか！助けて下さいよ！なッ」「ごめんな 呑もか

「そうだな」そんなこんなで三人が呑んで居ると朝音と姫花と言葉では表しきれない何かが、帰って来た。

「グロ あの 食事中にこんなグロイ物見せんでくれませんか？他の客の人、引いてますよ？」「ごめんなさいね、じゃあ」「ドンッッ！！」「うわぁ」「何か（元仁）」「は、朝音によりギリギリのラインに帰って来た？

「飲みましよ」「はい すまん、仁」「そしてその後、特一大隊の隊員がみんな集まり大宴会を催した。そして大宴会が終わり、二次会でのエピソード

「ねえ阿斗君、彼女いる？」「え？！いませんよ」「つまんない」「凧ッ！この」「じゃあ朝音さんは？」「聞きたい！」「さあ？どっちでしょう」「いる？」「正解」「え？！誰？！」「それは、教えなない」「阿斗知ってる？」「いや、知らない」なんて言ってますが心の中では「俺のアニキだよって言えねー（涙）」

そんな事が渦巻いています。そんな渦を感じながら一日目は、終わりました。

二日目、この日はいたって平和でした天気も良かったし

ゆるゆるとした時間を過ごし久々に軍人である事を忘れられたら日でした。良かったな……。ゆるゆるだったんで、三日目の計画を練ってみました、久々に、梅と桜と三人で遊ぼうかと思えます。

そんな事を思いながら過ごし、とうとう夜です。早めに寝て体力回復、温存です。ので、お休みなさい。

その頃満点の星空に三つほど他の星とは違う光がこの世界に降り注ぐようにしていた

第二章

「おはツツツ?!」阿斗は驚愕した。それはそのはず、多少の攻撃にも耐えられるように造つてある天井に大穴が開いているからだ。「まずは状況をツツツツ?!」もう一度ビツクリ、横を見ると其処には一人の少女が寝ていた。「え?どうしよう」「阿斗があたふたしている、その少女が目を覚ました。」「?」「ツツツツツツ!!」「可愛い」「あの」「は、はい!」「あなたが神刀阿斗さんですか?」「え?何故私の名を?」「分からない」「でも、この名前だけは、覚えているの」「私の名だけ?」「はい」「そうか」「名前は?」「え?私の名前は、リン」「そうか」「じやあリンよろしく」「よろしく」と、挨拶は交わしたものの少し気まずい空気が流れてきた。」「

『「まずは 朝ご飯でも食べますか」「は、はい

」と、阿斗が動こうとした時、チャイムが鳴った「何イイイ!?!」「え????どうしたの?」「少しヤバイ」「何で?」「

遊ぶ約束をしていた子たちが来たんだ」「?????」「兎に角隠れて!!」「は、はい!」「リンが隠れたと同時に部屋のドアが「ドパアアン!!!」とゆう有り得ない音と共に開き、二人の少女が阿斗に向け突撃した。『えい!!!』『グフウ!!!?!』『お兄ちゃん起きて!!!』『おう 梅に桜か おはよう』『おはよ

い!!!』『朝から元気だな』『うん!』『お兄ちゃんと久しぶりに遊べるからね!』『そう言ってくれるのは嬉しいんだがな

」『????』『朝からソレは止めてくれんか?』『え~~~~』

「いや、朝からだ結構キツイんだよ」「ヤダ」「頼む!

『ヤダ』『ならお菓子を買ってあげよう』『!!!!!!』『どうだ

?』『うゝん』『どうする?』『良いよ!!』『梅は?』『うゝん

梅が考えていると桜が「梅ちよつと来て」「うん」「なんだ?作戦会議か?」とここで姉妹の作戦会議が始まった。

桜・梅サイド

「お姉ちゃんどうしよう　（・・・）」「梅、貰うよ」「でも、貰ったら、出来なくなるよ？」「大丈夫、またやれば良いの」「やつても良いの？」「阿斗だから良いの」「良いの？」「うん、良いの」「分かった！」「だからね　」と案がまとまって来た桜・梅サイドから、阿斗サイドに交代。

阿斗サイド

さて、どう来るかな　梅は大丈夫そうだが、桜は　意外と策士だからなあ　油断が出来ないからどうするか　今度来る時には、トラップでも仕掛けておくかな。しかし、子ども相手に大人気ないな　俺も

と、両サイドの考えがまとまった所で両者の策略スタートです（〃

。。。ノ

「桜、どうだ？」「お兄ちゃん、何が？」「流石　」「？」「梅は気にせんで良いぞ」「そうよ、梅」「？？」「で桜、君の策は？」「何にもないよ」「そうか　あのな今日はスマンが遊べなくなっただんだ」「えゝゝゝ」「ホントゴメン」「どうして？」「軍の事があつてな」「そうなんだ　」「なら、いつだったら遊べるの？」「来週かな」「分かった　」そのウソの事を伝えたと桜は、「それならしょうがない」と言つて梅を連れて帰つて行つた。「もう大丈夫ですよ、朝ご飯を食べましょう」「はい」そして二人は、阿斗の部屋から食卓へ移動した。

「好き嫌いとかありますか？」「ないですけど　」「なら良かった」

リンの頭に「？？？」が浮かんでいるうちに、料理がどんどん運ばれていきいつの間にかリンの前が料理でいっぱいになっていた。

「す、凄い　」「料理なら多少は出来るんですよ」

リンは、心の中でビックリした、何故なら出てきた料理が多少の域

を楽々越えている程だったからだ。

「食べますか」「はい」

二人は、ご飯を食べて何をしようかを考えた。

「何しようか」「うーん」二人が考えていると阿斗の傍らに置いてある電話がなった。

「なんだ？」

すると、電話からは、神国軍総司令音水元来の声が響いた「特一大隊に出撃命令だ」「え?!」「どうしたの?」「出撃命令が下った」「えっ?!?!」

第三章

「阿斗、出撃命令って？」

「そのままだよ、俺、軍に所属してんだ」

「嘘」

「本当、リン　いきなりだけど軍に入らないか？」

「え？」

「俺の考えだと、もしかしたら、リンだけが飛ばされた訳とは限らない、つまり他に誰かが一緒に飛ばされたかもしれない、それなら各地に行く軍にいた方が見つかりやすいと思うんだが」

「分かった　でも、よく頭が回るね」

「だろ？自分でも怖いくらいだよ　良いんだね？」

「うん。」

2人は神国軍本部に行き、神国軍総司令、音水元来に事情を話した。
「ほう　つまり、軍を使って「果てなき人探し」をしたいと

」

「ダメか？」

少し時間経ち、2人が顔を見合わせると同時に元来が口を開いた。

「良からう」

「本当か！！？？」

「本当だ。しかし、条件がある。」

「？」

「簡単な事だ、死ぬな・諦めるな・必ず見つける　この3つを絶対
対に守れ」

「御意」

この瞬間空気が変わったのをリンは感じた。

「では早速出撃してくれ。場所は　南にある同盟国の
だ。」

「えっ？」

リンは、その国を知っているような気がした

阿斗が隊長を務めている部隊、「特務第一大隊」の詰所にて。

「姫花いるか？」

「何ですか？隊長さん？」

と、こんな優しい口調だが、彼女の背後からは、凄い魔力が吹き出していた

「姫花 怒る前に 俺の話を 聞いて くれ」

阿斗は力無く何かを取られたように倒れた。

「阿斗さん?!」

「そこの方、大丈夫ですよ。何時もの事ですから」

「えっと」

「姫花、音水姫花です。あなたは？」

「音水 このの？」

「ええ。音水元来は私の叔父です。」

「遅れました、リンといいます。」

「リン さんですね？何故此処に居るのですか？此処は軍ですよ？」

リンは此処でも空気がいきなり変わるのを感じた。

「えっ?! それは」

リンはこの空気が変わるのに対応しきれなかった

「姫花 今からその事を 話すんだ」

「そうなんですか？それを早く」

「言いたくても 兎に角聞いてくれ」

阿斗はこれまでの事を姫花に話した。

「 と言う事だ この事は、元ジイにも話してある。」
少し考えていた姫花の答えは

「 分かりました。協力しますよ？リンさん。」

その答えには優しさがあつた

「姫花さん　ありがとうございます！」

「姫花、みんなは？」

「いつでも」

「特一大隊出撃！！」

そのかけ声と共に阿斗が風に包まれた。

「阿斗さん？！」

「リンさん、大丈夫、こっちに」

「は、はい！」

南国ギルジア上空

「と、作戦はこうです、皆さんいいですね？」

「（、ー、）ゞ了解！」

「了解した」

「姫さん、OKです」

「了解！！」

「隊長さん？」

「リヨウカイシタ」

「阿斗　さん？」

この声　リンにとっては聞いた事ある声だった

何故なら、この声は

「開始だ　姫、リンを頼む！」

「はい！」

それと同時に特一大隊の面々が小隊サイズに分かれ降下を開始
少し遅れて他の味方艦からも味方が降下、各隊特一大隊の小隊にそ
れぞれ続いて行った

「凄い」

「でしょ？私もそう思います」

その会話の時、2人は少し和んだ。

「行きますよ？」

「はい！」

その声を聞いた神は艦隊の先頭から2人の居る艦の後方に移動、手を差し出した。

「乗りますよ？」

「は、はい！」

2人が神の手に乗ると同時に艦隊が楔型から、鶴翼の陣に変わり始めた

その中心は神

完了と同時に神は手を一振り

神の左右にいた大型艦を除き戦いの始まった戦場へと進軍

左右の艦は上昇、神はその艦からの降下部隊と共に降下、姫花とリンを地上に送った

「頼むぞ姫花」

「はい！」

「阿斗さん？」

「リン、姫花から離れるなよ」

「うん 阿斗も！気を付けて！」

「ありがとう」

神は大型艦を追うように急上昇した

「行きますよ」

「はい」

ギルジア海高高度海上

「作戦通りだ！！良いな阿斗！！」

「イツデモダ」

「よし 作戦開始！」

大型艦より小型機が射出、神の左右に付いた

「艦長！支援は頼んだぞ！」

「任せろ！」

「コウカカイシ」

神と小型機は急降下、それに続き戦艦も降下を開始した

帝国軍南方征空軍

第五艦隊旗艦アルマリア

「敵はどうだ？」

「鶴翼にて進軍中です」

「射程圏に入り次第一斉射開始だ」

「艦長！！」

「何だ！！」

「敵がツツ！！」

ドゴンツ！！！！

という音と共にに大きな振動が襲ってきた。

「艦長！！奴です！悪魔が！！来ました！」

「来たか　付近の艦に狙撃をさせる！」

「ダメです！！左右にいる、三番そして五番艦が！！」

「何イ！？」外を見ると、小型機の奇襲にやられ火を噴いている艦の姿があつた

「ヲヲヲヲヲヲ！！！」

ズドンツ！！

今度は、さつきより大きい振動が艦を襲った。

「我が艦だけでやるぞ！」

「しかッ！！うわぁ！」

パリン！！

ブリッジを囲っていた魔導製ガラスが割れ船員に降り注いだ。

「この　悪魔が　」

グシャ！！

その後、旗艦アルマリアはギルジア海に消えていったとゆう

第三章（後書き）

まず、この小説を読んでくださってくれている方々に感謝ですm（
——）m

轟天と言っ者です

まだ、書き始めたばかりの新参者ですが、今後ともよろしく願い
します（・、・）

この小説を読んでくださっている方々へ

出来ればなんですが、感想をよろしく願いますm（——）m
今後に生かして行きたいと思いますのでm（——）m

今後とも、この小説をよろしく願います（・、・）
それではまた（^^）ノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3183/>

天造神と天使の一生

2010年10月14日17時03分発行